

円徳寺 『教行信証に学ぶ会』 第七回 (令和二年十二月)

講師・延塚知道先生

《一席》

はじめに

こんにちは。寒い中、そしてコロナで大変な時に、ようこそおでかけくださいませが大変ありがとうございます。心から敬意を表します。がんばって喋らんとあかんと思っております。

こういう状況なものですから、大谷派で言いますと、ご本山の関係は全部一応中止になってます。報恩講はご本山でお勤めをしましたけれども、末寺の方では例年のような報恩講がなかなか勤められなくて、皆さん苦勞しながらお勤めになられているところ、あるいは今年は止めておこうと言つて、院内というか、ご住職、ご家族で報恩講をお勤めになる、そういう状況ですね。それから別院関係はほとんど中止になっています。それから教区、九州教区、あるいは組、田川組というところの公の事業も全部中止になっています。それで、この時期にこうやつてお話をさせていただくのは田畑先生の会だけです。大変嬉しく思っております。

一年間ほとんど出ることがないものですから、その間に本を書くうと思つて、今は『高僧和讃講義』の四巻目、最後の巻ですけれども、正月明けくらいに書き上げようと思つて一生懸命がんばつて書いてます。原稿を書き出しますと、ずっとそればかり考えていますから、夜、大体二時間おきに目が覚めます。寝ていても夢を見ています。ですから自律神経がおかしくなつて、私の癖ですけれども、ちよつと鬱状態で、やつぱり書くのは難しいですね。歴史に残りますので、間違つてはいけません。当たり前のことで、自分の勝手なこ

とを書いてはいけません。親鸞聖人がどんな思いでお書きになったのか、それを一生懸命考えていますと、分かつて嬉しいことがあるんですけれども、分らないと苦しくて、というか、分らないというのは、分らないわけではないことかということか、どうしても核心がつかめない、それがどういふことかということか、寝ても覚めても考えてましてね。

しかし、今回、『高僧和讃講義』を書かせていただいて、七祖の方々を親鸞聖人はどんなふうに見ておられたのかね。七祖の一人お一人にきちつと役割を担っていたらいい。一人一人を見れば、龍樹も世親も菩薩ですから、それぞれ、大変幅広い形の書物をたくさん書かれていますよ。

ところが、例えば、親鸞聖人が龍樹を見る時には、たったひとつ『十住毘婆沙論』の易行品というところだけを取り上げるわけです。それは龍樹全体からすると片寄り過ぎているんじゃないかと思えますよ。ところがそこを突破口にして、『大経』の仏教を明らかにしてくださつた人、として限りなく尊敬するわけです。ですから、どういふふうに関親鸞聖人が龍樹菩薩を見たのかね。

親鸞聖人はなぜ『往生要集』を取り上げるのか

最近ですと特に源信僧都ですね。源信僧都は天才的な仏教者でした。法然の前に天才的な仏教者と言えば、やつぱり源信僧都です。ご著書、あるいはたぶん源信僧都が書いたものであろうというものを合わせると、百五十部といわれますから、百五十冊の本を書いているのです。とんでもない量の書物をお書きになつていらっしゃるわけですね。その中で『往生要集』だけを取り上げて、『大経』の本願の仏教を明らかにした方として尊敬するわけです。ところが源信という方はものすごく幅広い方ですから、日本の八宗・天台宗をはじめとし

て、奈良の南都の仏教、それから真言宗、あらゆる方たちの教科書と言つてもいいくらいのたくさんの本を書いているわけです。その中で『往生要集』だけを取り上げておられる。

そして不思議なのは、「三一問答」の前に『往生要集』を引いてくるのです。

『教行信証』で最も重要だと思われる「三一問答」、

これは親鸞聖人独特の、本願の世界を開いていくときの、突破口になるところです。本願の世界は考えるのじゃなくて、信心。これまでお話ししてきましたように、私たちの上に開かれる信心というのは、これは他力の信心と言われますね、それは私たちが何かを信じるといふのではなくて、如来の本願力が信心となつて私たちを救つてくださった、こういう感動があるわけですね。ですから本願を親鸞聖人が『教行信証』に書いていくときには、他力の信心ということから本願を見て書いている。当たり前のことですね。その信心を、「信心と本願とが同じものなのですよ」ということを表す「三一問答」というところがある。

その「三一問答」の前に『往生要集』を引いてくるのです。一体どういうことだろうか。

三経一異の問答

もう一つは、これまで少しお話してきたように、

親鸞聖人は『大経』を特に大切にします。

しかし『観経』は『大経』の本願の世界に導くためにどうしてもなくてはならない経典です。

そして『阿弥陀経』は、私たちに信心ということが起こつたとしても、皆さんもそうだと思いますが、仏教に真面目になればなるほど、

一生懸命自力を尽くして、念仏をして、勤行をして、こうやって聞法に出かけて来る。死ぬまで、他力の信心が起こつたとしても、自力を生きるということまで変わらない。最後までやつぱり自力で頑張るしかないわけです。だから『阿弥陀経』には「一心不乱に念仏しなさい」と出て来る。

ところが救いは他力の救いなのだから、「自力はだめじゃないか」と『観経』ではそう書かれている。ところが今申しますように、死ぬまで自力が抜けないんだからね、仏教に触れたのなら、触れた仏教をほめて、そして自力を尽くして、最後まで一生懸命生きなさい、そのまんまが実は仏様の本願の中にあるんですよ、ということを明らかにしてください。『阿弥陀経』です。

ですから浄土の三部経をお釈迦様が説いてくださったのは、ひとえに私たちのような自力から離れられない者、自力によつて死ぬまで生活者であることから離れられない者を救うのが本願の仏教だということなので、『大経』を中心にして、『観経』と『阿弥陀経』、その三つの経典を大切にするわけですね。その三つの経典が、どんな関係になつてゐるんだらうかということを表すところが、『教行信証』で言えば「三経一異の問答」というところ。これから皆さんと一緒に拝読していきますので、やがてそこになつていくと思います。

『教行信証』は「三一問答」と「三経一異の問答」、この二つの問答が核心になつています。

三一問答

「三一問答」の方は、私たちの信心は本願の信心です。衆生の信心と如来の本願とは本来違うものです。だけでも信心は本願なのだということも明らかにしていく。そして本願の中でも十八願、これが一番大切です。その十八願の悟りの世界を知るためには善知識に遇

うこと、先生にお会いすること、先生に念仏の教えを教えていただくこと、これが十七願です。十七願・十八願、そして浄土の悟り、涅槃の悟りをいただく、それが十一願です。ですから四十八願の中にちゃんと凡夫が救われていくように、弥陀の大悲が込められているわけです。今日これから皆さんと読んでいくと分かります。阿弥陀さんと言うのは、この世に戸籍はありません。けれども、『大経』の中で今言ったようにちゃんと四十八の本願を説いている。なんで説いたかと言ったら、たった一つ、「凡夫を救う為」です。

ですから「三一問答」の方は「弥陀の大悲」を推求している問答です。それに対して「三経一異の問答」は、なぜお釈迦様が『大経』と『観経』と『阿弥陀経』を準備してくださったのか。それはたったひとつ、凡夫を救う為です。

ですから「三経一異の問答」の方は「釈尊の大悲」を明らかにしている。

二尊の大悲

「弥陀の大悲」と「釈尊の大悲」、これが親鸞聖人の仏教に触れた核心になります。

その二つをひとつにして

「如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし」

これが弥陀の大悲ですね。それから

「師主知識の恩徳も ほねをくだきても謝すべし」

これはお釈迦様を始めとする七祖の方々の恩徳ですね。

自分のいのちを捨てても感謝すべきものは、「阿弥陀如来の大悲」と、この世に直接出てきて阿弥陀の本願を説き、私たちを救おうとして八十年の生涯を捨ててくださった「お釈迦様の大悲」、このふた

つが親鸞聖人の最後の絶唱になります。

なかなか難しい和讃で、「身を粉にしても」とか「ほねをくだきても」というのが、なかなか私の身にピンと来なくて、難しいなあと思っております。ですけども、私の先生がお亡くなりになる時のご様子を見ておりました。「ああ、あの恩徳讃という和讃は、自分の肉体のいのちよりも、もつと大切な、南無阿弥陀仏のいのちに目覚めた人の詩なのだ」ということがはっきり分かりました。

先生は危篤になっても念仏の大切さをずっと話しておられました。

「先生、もう分かりました。どうか少し休んでください」と申し上げて、かすれた声ですけどね、「いや、大事なものは念仏や」と。そして「これから残った人たちに、若い人たちに念仏を伝えてほしいんだ」と言つて、一生懸命お話されるから、「もう分かりました、先生、いのちを縮めますから」と何遍も申し上げるのですけど、「私のいのちなんかどうでもいい、南無阿弥陀仏のいのちほど大切なものはない」と最後までそう言ってお亡くなりになったのを私は見たのです。

そう思うと親鸞聖人の『教行信証』の全体がそうなっている。

その一番大切な「三一問答」と「三経一異の問答」の前に、どちらも源信僧都の文章があるのです。一体どういうことなのかね。これは私が『教行信証』を読み始めてからずっと考えていたことですけども、なかなか分からなくてね。分からなくてというよりも、ぼんやりと分かっているくらいでは話にならない。こういうことだという確信がないとね。今回はつきり分かりました。

三三の法門―親鸞聖人の学問

親鸞聖人の学問は、まとめて申し上げますと、(皆さんすぐ分かると思いますが)、

『大経』は第十八願、本願を生きる衆生は正定聚の機。その往生は難思議往生。

『観経』は第十九願、機は邪定聚の機。往生は双樹林下往生。

『阿弥陀経』は第二十願。正定聚に対して不定聚といひます。

そして往生は難思議往生の「議」を一つ取って難思議往生。

これを一つにまとめると「三三の法門」と言われます。

十八、十九、二十の本願。

『大経』、『観経』、『阿弥陀経』。

正定聚、邪定聚、不定聚。

往生は難思議往生、難思議往生、双樹林下往生。

全部三つですね。

親鸞聖人の『教行信証』に表われている学問をきちつとまとめる
と、昔からそういうふうに言われてきています。これが三三の法門、
これが『教行信証』に明らかにされている親鸞聖人独特の学問なので
す。

これはなかなか難しいかな、最初からちよつと難しいことになつ
ちよつとごめんね。でもこれは何遍も何遍も同じこと言わないとし
かたがないのよ。僕も含めて皆さんちよつとボケ気味やろ(笑)。そ
うなると、同じことを何遍も繰り返す。そうすると段々身にしみ込
んでくるからね。

親鸞が源信から教えられたこと

皆さんも少し勉強した人なら分かると思いますが、七祖は龍樹か
ら善導大師まで、そして日本は源信、源空ですね。善導大師までは
聖道門に対して浄土教は修行ではなくて称名念仏、(これは教の巻で
またお話ししますけど)、称名念仏、善導大師までは「行」、念仏とい
うこと一つをはつきりさせたのです。それは分かりますね。法然上人
はそれを引き継いだから、『選択集』は「ただ念仏しなさい」「念仏ひ
とつでいいんです」とおっしゃるんですね。

ところがね、源信という方は、念仏は大事だということはその通
りだと。ところが念仏をしていると言つても、それぞれ心がけが違
うやろうというわけや。本当に本願に目覚めて本願の念仏というも
のを称えている人と、それから、本願はよう分からんけど、とにかく
南無阿弥陀仏を称えるのが大事やろうと思つて称える人と、念仏が
大事かどうか分からん、それよりもやつぱり娑婆で働く方がいいと
思うとつても念仏するわけですから。

今日、皆さんここでみんな念仏しましたよ。だけど、顔を見とる
だけではようわからん。「行は念仏、それはいい、だけど、称えてい
る人がどうなつとるんや」ということをきちつと言つた人は源信が
初めてなんです。これはすごいことです。道綽、善導という方たち
は、念仏が大事だ、聖道門に対して念仏ひとつだ、と言つた。それを
法然が引き継いだから、念仏ひとつだ。だから法然もそこ(信心)
は言わないんです。それを言うとならば法然門下がバラバラになるから。

今日、皆さんお入りになつた時に、お名前を書いてくださったで
しょう。あの時に「あなたどこまで分かっているのか?」と聞かれた
ら、たぶん半分ぐらいは帰りますよ。(笑)だからお寺に来たときは、
そういうことを言うたらあかんです。とにかく「お念仏しましよ

う」と、こういうふうに、みんなをまとめていつとるんでね。それを「一人ずつの信心をはつきりさせなさい」なんか言い出すと、それはバラバラになって壊れてしまう。

法然という人はそういうことを全部分かつている。だから、機の信心は問わない。だつて法然門下三百八十余人おられますけど、元は全部聖道門なんだから。だから、いろんな思いを持つて念仏しとる人がおるわけです。それを全部まとめてるわけです。それでいいんですよ。いいのだけれども、源信は「念仏しているあなたは自身はどいうのですか」というふうに、浅深、信心の深い浅いをはつきりさせた。それは行ではなくて機の方、行を称えている人間の方に着目した。

親鸞はそれを受け継いで、十八願を称えている人間は正定聚なんや、十九願、これは聖道門、自力、それは邪定聚なんや、二十願、これは不定聚なんや、と。ちゃんと人間を見ている。その人間洞察の鋭さ。これが親鸞聖人の『教行信証』の持つている大きさです。そこに源信の影響によって、善導大師まではなかった、念仏を称えている人間にまできちつと立ち入っていく。お釈迦様が説いている『大経』の中にちゃんと正定聚、邪定聚、不定聚と説かれている、その意味がわかったと言われる。親鸞は源信によって教えられたのだ。

親鸞聖人の「三三の法門」という学問の基礎は源信にあると、私は言ってるんです。

「学問」として完成している『教行信証』

今回、私は源信で悩みましたけど、よう勉強させられました。「そうだ」と思って嬉しかったですよ。「これで死んでもいいかな」と思うぐらい嬉しかったですね。まあ、機に着目してね、人間の方に着目してね。

法然上人の『選択集』は、「念仏しなさい」です、どんな人でもいから念仏しなさいと勧められた。皆さん知っているように白拍子というような方でもね「いやいや、あなたが辛かったら、止められるものならお仕事を止めなさい」、だけど「止められないというのなら、そのままでもいいから念仏しなさい」と言つて法然上人は優しかった。どんな人にもね。人を殺したような人でも受け入れて、「あなたの罪をよくわかって、それをもとにして念仏する者になりなさい」と言つて、念仏を勧めたんですよ。

ところが親鸞聖人は、今日これからお話をしていきますけれども、自分の奥の奥まできちんと仏様の智慧に照らされて、そして最後の最後のところは、分別を超えた命そのものになりきつて、「命の願いである本願に生きる者にまでならないと本当の救いにはなりませんよ」ということを『教行信証』の中ではつきりとさせていくわけです。

そんなふうに関親鸞聖人は七祖の方々の学問を受け止めて、最終的には今申し上げたように『教行信証』全体を「学問」として完成させるんです。

皆さんは「学問」と言うと、「いや、それは私に関係ない」と思われる方もいらっしゃるでしょう。学問は大事なんです。自分のことを申しあげて恐縮ですけども、私は松原祐善という先生によって人生が決定しました。だけど学問を教えて下さったのは寺川俊昭という先生でした。面白いことに、親鸞聖人の源信僧都のところを見ると学問的な和讃がずっと出て来るんです。だけど、法然上人になると学問的な和讃はひとつもありません。要するに「あの人は偉いよ」と言つてますよ。「あの人は偉い人や」と。そう言うのが一番

書きにくい。だから法然上人によって人生が決定したのでしょうね。けれども今言ったように、「三三の法門」というふうに学問として、それを明確にしていく時には「私は源信僧都に大きな影響を受けたのです」というふうに書かれているように思います。

四巻目が最後になりますので、できたら是非読んでみてほしいと思います。

「大無量寿経」―教の巻の標拳

今日から、皆さんと一緒に「教の巻」を拝読していきます。

総序が終わりますと、総序の次に「大無量寿経 真実の教 浄土真宗」、標拳と云うのですけど、見出しですね、これが書かれています。そしてその後、「顕真実教」「顕真実行」教・行・信・証・真仏土・化身土と『教行信証』全体の目次が並べられます。

ですからこの各巻に、

行の巻は第十七願が見出しにあがります。諸仏称名の願、これが
行の巻の見出しです。標拳ですね。それから

信の巻は第十八願・至心信樂の願、これが標拳ですね。それから
証の巻は第十一必至滅度の願、これが標拳になります。それから
真仏土の巻は、第十二・十三、無量寿・無量光の願の二つが標拳に
なります。

化身土の巻は第十九・二十の二つ、自力を表す十九願と二十願と
が標拳になりますね。

教の巻だけは願文の標拳はあがっていません。そういう意味から

言うと、一番最初に書かれている「大無量寿経」、その下に「真実の教」と「浄土真宗」と、二つが並べられています。ですから「真実の教」という教の巻は、標拳から言うと「大無量寿経」、「真実の教」ですから、教の巻の標拳は願文はあがってないけれども、「大無量寿経」、これが標拳だと考えていただいていいと思います。

そのあと「浄土真宗」という中に教・行・信・証・真仏土・化身土とあるわけですから、そういう意味では「大無量寿経」というのは、直接的に言えば「教の巻」の標拳になります。しかし「大無量寿経」と言うのは全部にかかっている、「浄土真宗」全部にかかっているわけですから、そういう意味から言うと、全体の標拳にもなります。

そういう二重の意味があるために「大無量寿経」と掲げて「真実の教」というのと「浄土真宗」というのと二つの小さな表記があるわけですね。

そういう意味からすると、教の巻は本願は上がっていない。けれども、「大無量寿経」、これが、当然のことですけども、教の巻の標拳と考えるといい。それは私が説明するまでもない。

教の巻の内容

教の巻はちよつと難しいですけども、短いですから、皆さんと一緒に読んでみましょう。

『大経』しか引かれてない。いいですか、読んでみますよ。

「謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について、真実の教行信証あり。」

それ、真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり。

この経の大意は、弥陀、誓いを超発して、広く法蔵を開きて、凡小

を哀れみて、選びて功德の宝を施することをいたす。釈迦、世に興して、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり。ここをもつて、如来の本願を説きて、経の宗致とす。すなわち、仏の名号をもつて、経の体とするなり。」

はい、ここまでは、親鸞聖人が『大経』の大切なところを、ご自分が筆をとつてお書きになったところになります。この後は、親鸞聖人がお書きになったことを証明するものとして『大無量寿経』そのものを引いてくることになります。それは皆さんよくご存知のように、お釈迦様と阿難とが出遇った、その出世本懐が説かれている『大経』の文章が引用されます。そこを読んでみましょう。

出世本懐―釈尊と阿難との出遇い

何をもつてか、出世の大事なりと知ることを得るとならば、

『大無量寿経』に言わく、今日世尊、諸根悦予し姿色清浄にして、光顔魏魏とましますこと、明らかなる鏡、淨き影表裏に暢るがごとし。威容顕曜にして、超絶したまえること無量なり。未だかつて瞻靚せず、殊妙なること今のごとくましますをば。ややしかなり、大聖、我が心に念言すらく、「今日、世尊、奇特の法に住したまえり。今日、世雄、仏の所住に住したまえり。今日、世眼、導師の行に住したまえり。今日、世英、最勝の道に住したまえり。今日、天尊、如来の徳を行じたまえり。去来現の仏、仏と仏とあい念じたまえり。今の仏も諸仏を念じたまうこと、なきことを得んや。何がゆえぞ威神の光、光いまし爾る」と。ここに世尊、阿難に告げて曰わく、「諸天の汝を教えて来して仏に問わしむるか、自ら慧見をもつて威顔を問えるか」と。阿難、仏に白さく、「諸天の来りて我を教うる者、あるこ

となけん。自ら所見をもつて、この義を問いたてまつるならくのみ」と。仏の言わく、「善いかな阿難、問えるところ甚だ快し。深き智慧、真妙の弁才を発して、衆生を愍念せんとして、この慧義を問えり。如来、無蓋の大悲をもつて三界を矜哀したまう。世に興する所以は、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり。無量億劫に値いがたく、見たてまつりがたきこと、靈瑞華の時あつて時にいまし出づるがごとし。今問えるところは饒益するところ多し。一切の諸天・人民を開化す。阿難、当に知るべし、如来の正覚はその智量りがたくして、導御したまうところ多し。慧見無碍にして、よく過絶することなし」と。已上

ここまでが『大無量寿経』のお釈迦様と阿難との出遇いになります。それと同じところをそのあと、『無量寿如来会』、『平等覚経』、これは異訳の經典ですね。その二つが引用されます。そのあとに、これは朝鮮の憬興という方の『大経』の注釈のところですが、丁度この阿難と釈尊との出遇いのところが引用されていきます。そこを読んでみましょう。

『無量寿如来会』、『平等覚経』『述文讚』からの引文

『無量寿如来会』に言わく、阿難、仏に白して言さく、「世尊、我如来の光瑞希有なるを見たてまつるがゆえに、この念を発せり。天等に因るにあらず」と。仏、阿難に告げたまわく、「善いかな、善いかな。汝、今快く問えり。よく微妙の弁才を觀察して、よく如来に如是の義を問いたてまつれり。汝、一切如来・応・正等覚および大悲に安住して、群生を利益せんがために、優曇華の希有なるがごとくして、大士世間に出現したまえり。かるがゆえにこの義を問いたてま

つる。また、もろもろの衆生を哀愍し利樂せんがためのゆえに、よく如来に如是の義を問いたてまつれり」と。已上

『平等覺經』に言わく、仏、阿難に告げたまわく、「世間に優曇鉢樹あり、ただ実ありて華あることなし、天下に仏まします、いまし華の出ずるがごとしならくのみ。世間に仏ましますも、はなはだ値うことを得ること難し。今、我仏に作りて天下に出でたり。もし大徳ありて、聡明善心にして仏意を知るによつて、もしわすれずは、仏辺にありて仏に侍えたてまつるなり。もし今問えるところ、普く聴き、諦らかに聴け」と。已上

(述文讚) 憬興師の云わく、「今日世尊住奇特法」というのは、神通輪に依つて現じたまうところの相なり、ただ常に異なるのみにあらず、また等しき者なきがゆえに。「今日世雄住仏所住」というのは、普等三昧に住して、よく衆魔・雄健天を制するがゆえに。「今日世眼住導師行」というのは、五眼を導師の行と名づく、衆生を引導するに過上なきがゆえに。「今日世英住最勝道」というのは、仏、四智に住したまう、独り秀でたまえること、匹しきことなきがゆえに。「今日天尊行如来徳」というのは、すなわち第一義天なり、仏性不空の義をもつてのゆえに。「阿難当知如来正覺」というのは、すなわち奇特の法なり。「慧見無碍」というのは、最勝の道を述するなり。「無能過絶」というのは、すなわち如来の徳なり。已上

その後、親鸞聖人がこれをまとめて、最後にご自釈をお書きになつてます。そこも読んでみましょう。

しかればすなわち、これ顕真實教の明証なり。誠にこれ、如来興

世の正説、奇特最勝の妙典、一乗究竟の極説、速疾円融の金言、十方称讚の誠言、時機純熟の真教なり。知るべし、と。

はい、ここまでです。今のが「教の巻」の全体です。読んで分かるように短いでしょう。

「教の巻」の全体の構成

まず、この「教の巻」の一番最初に、「浄土真宗」というものが二種の回向によつて成り立っている、二種回向の仏道であること、これを「真宗の大綱」といいます。

その次に「それ、**真實の教を顕さば、すなわち『大無量寿經』**これなり」、**真實教の宣言**。

その次に『大經』とはどういう經典であるかという大意、教の大意、これが述べられます。

その後、これまで親鸞聖人がここに述べてきたことは、『大經』のお釈迦様と阿難との出遇いをよく読めば分かるでしょうということで、『大經』の引文、釈尊と阿難との出遇い、それが説かれます。

その後、今度は、『大經』の異訳の經典、『大阿弥陀經』、それから『平等覺經』、それから『無量寿如来会』、それから『莊嚴經』という五つの異訳の經典が、『大經』を含めて五つ残っています)

その中の『無量寿如来会』と『平等覺經』
『如来会』ではお釈迦様と阿難との出遇いが、こんなふうに出遇われていますよと、同じところを引いています。

それから『平等覺經』が引かれます。
その後、憬興という朝鮮の仏教者ですけども、この憬興師は『大經』の注釈書を書いた方です。『大經』の注釈書はそんなにたくさんないので。古くは慧遠の『大乘義章』という注釈書がありますが、

新しいところでは、この憬興師の『述文讚』と言うのが『大経』の注釈書なのです。ですから、その『大経』の注釈書にお釈迦様と阿難との出遇いの五徳瑞現というところがあります。これはまた、これからお話します。

その五徳瑞現、阿難が「今日のお釈迦様は光顔巍巍と輝いています」と言うでしょう。そしてお釈迦様の姿は今日はこの五つの姿をしていますと、五つ褒める。それを五徳瑞現と言う。その五徳瑞現についての注釈だけを抜き出して、ここに出ます。ですから、基本的に「教の巻」は『教行信証』の経・論・釈というような引用の仕方ではなくて、『大経』のお釈迦様と阿難との出遇い、これ一つだと思ってください。

それを助けるために『如来会』と『平等覚経』があり、それを助けるための注釈書として憬興の五徳瑞現の注釈書があります。だから、基本的には『大経』のお釈迦様と阿難との出遇い、これが中心になつているというふうを考えられます。

そしてその後、最後に親鸞聖人がご自釈を書かれます。これはまたその時にお話しますが、「如来興世の正説、奇特最勝の妙典、一乗究竟の極説、速疾円融の金言、十方称讚の誠言、時機純熟の真教なり」と、こんなふうに出て来る。

これは親鸞聖人が「如来興世の正説」、『大経』で阿難が褒めたように、自分も五つあげて、阿難と同じように五つあげてね、お釈迦様の『大経』を褒めているわけです。ですからこれはご自釈なんですけども、親鸞聖人が阿難の立場に立つて、そして『大経』のお釈迦様はどんなお釈迦様かということをお命がけで褒めたところです。その辺が親鸞聖人の偉いところです。

分かりますね。ご自分の了解をちゃんと述べておられる。人の批判をするときには、自分の了解を述べたうえで、ここが違うと思

ますと言うのが正しい批判の仕方です。そうですね。批判だけしつぱなしの人ばかり。「お前なんや」と言ったら「ううん：」みたいな、それは批判になりません。

その辺が親鸞聖人は偉い。きちつと阿難が述べたように、私は『大経』のお釈迦様はこの五つなのです。阿難尊者に即して言えば、「私はこのように尊敬しています」と言つて、最後を締めくくるわけです。偉いでしょう、大切なところやと思いますね。

全体の構造はこんなふうになっています。ですから、くだいようですが、「教の巻」の一番の内容は、「釈尊と阿難の出遇い」、これにつきまます。そして『平等覚経』、『如来会』を読むと分かりますが、きちつとお釈迦様の出世本懐の文章とか、阿難の感動とか、それを最も正確にと言うか、もつとも詳しく述べられているのが私たちの正依の『無量寿経』です。『如来会』とか『平等覚経』はちよつとだけ。ですから親鸞聖人が、なぜ、私たちが今読む『大無量寿経』を正依の經典にしたかという、ひとつの大きな理由は、この出世本懐ということが明確に書かれている。

そこに浄土教、本願の仏教の特質、聖道門とは違う特質がよく表れている。それを正確にきちつと伝えてくださつてるのは、私たちの正依の『大無量寿経』という經典だけなのです。ですから親鸞聖人は、この『大無量寿経』という經典を自分の正依の經典にしたと言ってもいいくらい、大切なところになります。

これから五年がかりですから、今日でしょう、次でしょう、三回くらいでこの教の巻を終われたらいいなあと思つてます。ですから、この教の巻は、皆さんと勉強していく時に、かなり正確にというか、きちつと読んでいけるところや、と思ひますので、思ひ出した

ら、コロナで暇ですから、ぼーっと読んでみてください。大事なんです、読んでると、ふっと思ってた言葉が残ります。それが大事な事です。それから經典の言葉は難しいかもしれませんが、とつても大事な意味がありますから、それを少しずつ今日からお話をしていきたいというふうに思います。今日はその一回目ですからね、ちよつとまあ、少し横道にそれるかもしれませんが、少し休憩して、続けてお話させていただきます。

《二席》

それでは続けてお話をさせてもらいます。
前置きが少し長くなりすぎて申し訳ありませんでした。

『教行信証』制作の理由

「教の巻」に入る前にですね、そもそも『教行信証』という書物はなぜ書かれなければならなかったのか、ということなのです。つまり親鸞聖人は、法然上人を大変尊敬していましたね。法然上人の著作に『選択本願念仏集』があるわけです。それから法然上人ご自身は『選択集』の中で「浄土宗」というふうにおっしゃるのですね。でも親鸞聖人は、例えば、今、私が書いている『高僧和讃』を見ましても、『高僧和讃』の源空のところですけども、最初に「本師源空世にいでて 弘願の一乗ひろめつつ 日本一州ごとごとく 浄土の機縁あらわれぬ」とありますね。その次に「智慧光のちからより 本師源空あらわれて 浄土真宗をひらきつつ・」とありますでしょう。法然は浄土真宗を開いたんやと、こういうふうには、和讃に宗名が出て来るところは全部「真宗」あるいは「浄土真宗」なのです。しかも親鸞聖

人は、自分は法然上人の教え以外に珍しい法を書いているわけではない、とおっしゃっているわけです。それならどうして『教行信証』を書かなければならなかったのか、皆さんどんなふうに思われますか。

これまでお話してきました中に、それに触れてお話したことありましたかね。ありましたか？ 『教行信証』は学者のためにかかれた著作です。同じことを難しい言葉で言っても分からないから、だからそれを和讃にして庶民に弘めたかった。これは申しあげました。しかし『選択集』という書物があるのに、しかも浄土真宗を開いたのは法然上人やと尊敬しているわけです。そして親鸞聖人ご自身も、自分は法然上人の念仏の教え以外に別に珍しい法を弘めようとしたわけではないと、ちゃんと書いているわけです。それなら『教行信証』を書かんでもいいやないかと。ところが『選択集』があるにもかかわらず、『教行信証』をどうしても書かなければならなかった理由、それは何かというと、それは重要なことになります。

これは『選択集』をまずちゃんと読まないといけないし（笑）、それから『教行信証』をよほどきちんと読まないといけない。ですからなかなか難しい問題ですけども、分かりやすいように、『教行信証』が何のために書かれたのか、その理由です。それを分かりやすいようにお話しときます。

『観経』―法然上人の立脚地

法然上人は、『選択集』の中で大切な經典は「浄土三部経と一論」だと、世親の『浄土論』と『大経』・『観経』・『阿弥陀経』、これが大事だときちんと書いています。ところが親鸞聖人の『教行信証』は「大無量寿経」、これが標榜ですから、そうするとその辺から少しね、も

ちろん親鸞聖人は『観経』について、『阿弥陀経』について、これは化身土の巻で、自力のところでも明らかにしていきます。だけでも「三経一論」と言った法然上人に対して『教行信証』は『大無量寿経』、こう言ってもいいでしょう。

もちろん法然上人という人は偉い人なんです。親鸞聖人が、まあ多分いろいろ議論をしてね、そして真意を法然上人にお聞きしたでしょうね。法然上人は、それに全部答えている。だから法然という人は偉い人でね、「三経一論」と言いますけれども、他の書物の中に、「大経」が根本である、やっぱり『大経』が大切なのだ」とおっしゃるわけです。

ところが、道綽と善導大師は、例えば善導大師は『観経』の注釈書を書いた。『観経疏』が大切ですね。それから七祖だったら、龍樹・天親・曇鸞は『大経』の祖師たち、道綽・善導・源信・源空はこれは『観経』の祖師たちというようによく言われます。

ですから法然上人は「『大経』が根本だ」と言っても、『観経』を立脚地にした仏教者である。『観経』は皆さんよくご存知のように、王舎城の悲劇を読むと分かりますね。凡夫が救われる。これが『観経』の特徴です。

だから当時の仏教界で聖道門に対して、凡夫と言うのは聖道門の立場からすると、もう仏教を歩む資格はないのよ。もう資格なし。だから凡夫なんて仏教から外されるのです。「唯除五逆誹謗正法」といつてね。だから比叡山には出家の僧侶しかないでしょう。比叡山だけではないよ、奈良もそうだし、真言宗もそうよ。出家の僧侶しかないよ、女人禁制やろうが、あれは。だから凡夫が救われるなんて言うのは、そんなものはあり得ない。

ところが『観経』は、これは凡夫の救いが説かれている。だから聖道門に対して、浄土門を独立させる時には、あなた達が、聖道門の人

達が捨てた凡夫こそ救われる。それがさつき和讃の一番最初に出た「弘願の一乗ひろめ」と、本当の意味の一乗、それは男とか女とか、それから尊いとか尊くないとか、そんなことは何も関係ない。「弘願の一乗」、それを説いたのが『大経』だと親鸞聖人は言いたいんだけどね。だから当時は浄土教は比叡山なんかでも、浄土の教えはちよつとあつたけど、それは隅の方に追いやられてね、一般的には凡夫なんて言うのは仏教を歩めない者として、仏教の中に入られなかったわけです。

だから聖道門と際立たせて浄土門が大切なんですという時には、凡夫まで救われるんですということが一番大切。ですから『観経』が一番分かりやすいわけです。そういう意味ではね。

もうひとつは行の違いです。行は聖道門、浄土教以外の行はすべて修行による。出家をして修行をしないとダメ。だから法然上人も、浄土教を独立させましたけども、最後まで出家の僧侶として戒律を保ちました。そして行の違いで一番分かりやすいのは「ただ念仏しなさい」これを旗印にして法然上人は聖道門との違いを明確にして浄土宗というものを独立させたわけです。その時に、今申し上げましたように、道綽、善導の『観経』に立った。

どうして念仏で救われるのか

ところが、簡単に申し上げますと、今でもそうですが、称名念仏、南無阿弥陀仏が大切だというのは、今どこの寺でも言うじゃないですか、みんなもね。ところが、それは浸透してないわけですよ。なんで、南無阿弥陀仏が大切なのか言えますか？

修行できる人は決まっている。それから、金持ちだったら寺を建てたり、お堂を建てたりすることはできる。法然上人は、修行もできない、お寺へ寄進もできない、どんどんしまいの方に行つて、もう

何もできない人のために、念仏だつたら誰にもできるから念仏ひとつが大切なのだという解説、説明はしています。法然はそう言っています。確かにそうかもしれない。しかし称名念仏がなんでそんなに大切なのか、そもそも仏教に救われないような凡夫が、なんで念仏に救われるのか、理由が分からない。どうですか、今でも浸透してないでしょう。

これからお寺は大変になりますよ。小さなお葬式ばかりになって。この間、三日ほど前でしたかね、うちに電話がかかってきた。家内が出て「もしもし・・」と喋っていると、「うちの住職はそういうことはしませんので」と、ぱつと電話切りよつたから、相談もせずに勝手に何言うよとんのやろうと思つて（笑）、「何やつたん」と言つたら、「いや、多分葬儀屋さんやと思うけど、葬儀お願いしたらいつでも出してもらえますかってかかってきた」というのです。「バカかお前、断らんかつたらよかつたのに（笑）、わしは行つて、一生懸命に話して、ひよつとしたら門徒が増えるじゃないか」と言つたら、「また、そんなことばかり言つて」とニタツと笑つた。いや、ほんとほんと、嘘じゃありません。うちの奥さんも大したもんやなと思つて。「うちの住職はそういうことはしません」と言つて、パチツと切りましたからね（笑）。まあまあ、ほんとの話ですが、これからそんなふうになつてきてね、坊さんにもちよつと何か渡してね、そして、小さなお葬式をやりましょうと、なんかテレビに出てるじゃないですか、今、あんなふうになつてきたら、しまいに「お寺さんもういらぬ」ということになつてくるかもしれない。

その根本理由は、仏教が何で大事なのかということがよく分からないし、それから念仏って何なのかということがよく分からない。だから、それに付随して、葬式を何のためにするのか、法事を何のた

めにするのか意味が分からない。これは私たちの責任です。これはやつぱり今まできちつと言つて来なきやならなかつた。何で葬式するのかね、何で法事するのか。きちつと言つて来なきやならなかつたのに、まあ私たちの責任ですね。その根本理由は「なぜ念仏によつて、しかも凡夫が救われるのか」、その理由が分からない。

『選択集』を法然上人が書いたんだけど、明恵という人が「おかしい」と徹底的に糾弾する一番の根本理由はそこです。言つてるところと分かりますね。せつかくですから、勉強ですから、見てみますか。

後序 『選択集』の書写

親鸞聖人は三十三歳の時に『選択集』を書写します。『選択集』を書写したという記事が『教行信証』の後序に出てきます。

私の聖典ですと399ページ（東聖典）、これは『教行信証』の後序ですけれども、真ん中辺に「然るに愚禿釈の鸞、建仁辛の酉の曆、雑行を棄てて本願に帰す。」と書かれていますね。これもね、ちよつと注意すると不思議な文章なんです。と言いますのは、親鸞聖人以外の法然の弟子たち、それから法然上人その人が念仏に帰依したのは四十三歳ですね。その時に書いている文章は「念仏に帰しぬ」です。「立ちどころに余行を捨てて」、立ちどころに善導大師の文章を読んで感動してね、今までの自力の行を捨てて、私は念仏に帰したんだというふうには法然上人は書いている。それと同じように、法然上人の弟子たちは、全部「念仏に帰しぬ」と書くのが普通です。ところがここは「本願に帰す」。「然るに愚禿釈の鸞、建仁辛の酉の曆」と言うのですから、これは二十九歳の時に法然上人に遇うたこと。その時に「雑行」、自力の混ざった行を棄てて本願に帰したんだと書いている。ここが親鸞聖人の特徴です。それが分かるように少しお話を致

します。

その次に、「元久乙の丑の歳、恩恕を蒙りて『選択』を書しき」。「元久乙の丑の歳」というのは、親鸞聖人が三十三歳の時、「恩恕を蒙りて」というのは、これは法然上人の許しをいただいて『選択集』を写させていただきました。

『選択集』を写したという弟子は、今、資料の上から言って五人しかいません。たった五人ですよ。だから法然門下でも『選択集』を写させてもらった人たちは高弟ばかり。今でいえば例えば、鎮西派・聖光上人。それから西山派。そういう浄土宗の祖師たちになつていゝる人たちが、そういう人たちが五人だけ、許しをいただいて『選択集』を写写している。ですから他の人は『選択集』は見えていない人がほとんどなのです。親鸞聖人は二十九歳で門下に入つて、たった四年間しかたつていないのに、その五人の一人に選ばれて『選択集』を写写させているのです、法然がね。だから法然上人の信頼がどれほど厚かつたかということがよく分かると思います。それがここ書かれています。三十三歳の時に法然のお許しをいただいて『選択集』を写写させていただきました。

「同じき年の初夏中旬第四日に」、「初夏」と言うのは四月です。「中旬」と言うのは初月中旬下旬だから、中旬と言うのは十や。「第四日」と言うのは十四日。だから「元久乙の丑の歳」で、三十三歳の時の四月十四日に「選択本願念仏集」の内題の字と「南無阿弥陀仏 往生之業 念仏為本」と、「釈の綽空」という字を、師の源空上人が「真筆をもつて、これを書かしたまひき」とあります。

ですから多分これは、四月十四日に書写が終わつたんです。書写が終わつたから、その表紙に法然上人ご自身の筆で「選択本願念仏集」と書いて、下に「南無阿弥陀仏、往生之業、念仏為本」という字を法然自身が書いてくださった。ですからこれはおそらく四月十四

日に『選択集』の書写が終わつたから、だから法然上人がこれを書いてくださったんだと、こういう意味です。分かりますね。

真影の図画

その「同じき日」、四月十四日に「空の真影申し預かりて」、源空上人の真影というのわかりますか。絵です、お姿です。これは師資相承という時には、その師の書いた書物と、それから師のお姿をいただくというのが師資相承という時のひとつの作法です。だからこの四月十四日に「空の真影申し預かりて、図画し奉る」と。つまり法然上人に『選択集』は書写させていただきましたが、お姿を写させていたでよろしゅうございますでしょうか」と言つたら、法然が「わかつた、それでいい」とこうおつしやつたわけです。

だから「真影を図画し奉る。同じき二年閏七月下旬第九日」、同じく元久二年の閏七月というのは、四月十四日にお姿を図画していいとお許しをいただいたわけですね。そして、五、六、七の三か月や。閏と言うのはひとつ多いのです。だからほぼ四か月後の七月下旬の第九日というのですから、七月二十九日に「真影の銘に」、お姿を写させていただきますの、その銘に源空上人が筆を持つて、「南無阿弥陀仏」と「若我成仏十方衆生 称我名号下至十声 若不生者不取正覺 彼仏今現在成仏 当知本誓重願不虛 衆生称念必得往生の真文とを書かしたまう」。出来上がった絵に法然上人が筆で、今言つたように南無阿弥陀仏と書いて、そしてこれは本願加減の文と言うのですが、この文章を法然上人が書いてくださった。そうすると四月十四日に書写が終わつて、七月二十九日、ほぼ四か月かかって絵が出来上がつて、その絵に法然上人がこの字を書いてくださった。ここまで分かりますね。

名の字―「親鸞」

そして「また夢の告に依つて」、親鸞聖人は夢の告げに依つて、「**綽空の字を改めて、同じき日、御筆をもって名の字を書かしたまい畢りぬ**」とありますね。ですから、この七月二十九日の日に親鸞聖人は多分、自分は夢を見たんだと法然上人におっしゃったのでしようね。そうしたら法然上人が、七月二十九日に「**御筆**」とありますから、これは法然上人の筆に決まっています。そうしたら法然上人が「**名の字を書かしたまい畢りぬ**」とあるわけです。

そうすると、この「名の字で何の名や？」という話になる。だから、これは実は覚如上人が書いた法然上人の伝記がありまして、それを『拾遺古徳伝』といいます、その『拾遺古徳伝』を見ると、これと同じ文章が書かれておつて、そしてその「名の字」のところに「善信」と書いたのだとあるのです。だから、つい最近までは、この「名の字」というのは「綽空」を「善信」に変えたのだとずっと言われてきました、江戸時代も今までずっとね。

ところが名前を忘れちゃった、ごめんさいね、女の研究者、女性の研究者ですが、どこの大学だったかな、やつぱり親鸞聖人の研究している女性がおられてね、これ「善信」と言われてきてるけれど、『教行信証』に善信なんて一回も出て来ないではないか、『教行信証』で「名の字」と言ったら「親鸞」しかないではないか、だから今まで覚如上人が善信、善信と言ったと書いているけど、『教行信証』で「名の字」と言ったら、どこをみても「愚禿釈親鸞」やから、「名の字」というのは、これは「親鸞」じゃないの、という問題提起をされました。二、三十年前です。ですから、つい最近です。それから問題になって、やつぱり彼女が言うように、これは「親鸞」だと思いません。私も本に書きました。

私たちの宗派で一番最初にそれを言い出したのは本多弘之という先生でした。本多弘之先生は親しい大先輩ですけど、よく一緒にお酒を飲みまして、私は最初は「親鸞」という名前は天親と曇鸞でしよう。ですから親鸞という名前は、これは曇鸞の『浄土論註』をよく読んで、そして天親と曇鸞の名前を頂くのは、もう少し後、流罪の後だと思つていたのです。流罪の間に親鸞聖人は天親と曇鸞をよく読んで、そして、その後だと思つていたから、「善信」と言うのはやつぱり正しいんじゃないかと言つて最初は喧嘩しました。喧嘩というか、学者の馬鹿どもは酒飲むとすぐに喧嘩しますから。つまり、どこに根拠があるか、なんでそんなこと言うんや、とわあわあ言つて、その時には僕は、やつぱり覚如という人は曾孫ですから、その血が繋がつた覚如が「善信」と書いているのだから、それは善信やろうと言つて、だいぶん言つたんです。

その後、一生懸命勉強してみましたら、実は、『論』・『論註』と言ふのは、『論』は比叡山に伝わっています。けども『論註』は比叡山には伝わっていないのです。だから親鸞がどこで『論註』を読んだかということになるのですが、実はずうっと『論註』を伝えてきたのは奈良の三論宗なのです。東大寺の三論宗ね。そこが曇鸞の『論註』を伝えてきました。それは曇鸞大師は三論宗の学者ですから、だから奈良の東大寺がずっと伝えてきたのですが、今度も法然上人を勉強しますと、法然上人はやつぱりどうしても救われたかつたのよ。苦労して苦労してね、そして先生を探して回るのやけど、おらんよ。二十六歳ぐらいで比叡山を下りてね、そして真言宗、それから奈良の東大寺、それから、そこら辺をいっぱい、偉い先生をめぐって回るのよね。その時にみんなが「法然というすごい奴が来た」と言つて、「この人すごい」と言つて、その時にみんな南都の人達が敬服して、そして自分たちが継承している、私たちの伝統ではこういうものを

継承していますということを法然に見せるのよ。おそろくね、法然はその時に『論註』を見たのだと思います。あるいは書写したのだと思います。だから南都のずうつと古い人たちは『論註』を引いているんだけど、その次に『論註』が出て来るのは法然なのです。

そして法然の後、『論註』が出て来るのは親鸞、隆寛。全部法然門下です。ということは法然が『論註』を見せたということになります。だから親鸞聖人は二十九歳で法然門下になった時に、おそらく法然上人が「善信これを読みなさい」と言つて『論註』を見せたのではないかと思えます。そうすると、二十九歳から三十三歳まで五年あります。書写するまでにね。五年あつたら親鸞聖人ほどの天才ですから『論註』はちゃんと読んだと思えます。

師資相承の時に交わされた論題

さつき僕は本を書き出したら寝られないんですと申し上げたでしょう。

実はね、四月に書写が終わる。そして終わつてから百二十日ぐらあります。そして最後に「名の字を書き畢りぬ」、「名の字を書きました」でいいわけです。ところが、書いて師資相承が終わつたんだと書いてある。そうするとこの師資相承の時に「自分は『論』、『論註』を読んでこう思うのです。法然上人あなたは道緯・善導の立場から称名念仏というものを前にして、前面に押し出して凡夫が救われるということを一生涯おつしやつた。それはその通りです。その通りなんだけど、その理由は何ですか？」ということになりますよね。「理由が分からないじゃないですか」ということを、法然上人に親鸞聖人が申し上げたに違いありません。これは見て来たことのように言うと言われますけど、見て来たのです（笑）。『選択集』をよく読んで、『教行信証』をよく読めば、透けて分かる。

「しつこいようですけども、念仏によつて凡夫が救われる、だから念仏ひとつでいいんだということを何遍もおつしやるけれども、その通りで、それでいいんだけども理由は何でしょうか。これがはつきりしなければ必ず聖道門の方から問題が出ます」と親鸞はたぶんそう言っている。だから法然も『選択集』の最後に「これを書いたものは口外するな。壁の中に埋めて絶対見せるな」と言っています。これは公になると必ず戦争になるからです。法然という人は偉い人だから分かつているからね。

しかも戦争になる時には、例えば、素行が悪いとか、それが一番先に取り上げられたんですよ。今の娑婆でもそうじゃないですか。誰が不倫したとか、あの人らはなんか可哀そうやね。僕はテレビなんか出らんでよかつたなあ。あんなことを言われるとすぐ一発でアウトでしょ。それを知ってるから法然は生涯戒律を守つたのです。あの人は偉い人です。浄土宗を独立するという責任があるからね。だからわざわざ出家の僧侶を守つたのですよ。

『高田正統伝』では九条兼実が「法然上人、あなたは結婚してもいいと言っているけど、どっちでもいいんやったら、なんで結婚しないのか、ずっと出家じゃないですか」と食い下がるのです。そうしたら「ちよつと善信おいで」と言つて、知つとつたんやね、善信があの娘を好きやということ。「善信、玉姫というお嬢さんと結婚したらどうですか」と言つたら、親鸞が「わかりました」と言つて結婚したんや。それは伝記の中にそう書いてある。

ところが玉姫というお嬢さんは九条兼実の娘やと出て来るのですけど、実際の娘の中には玉姫という人がいない。だからあれは伝説やと言われますけど、きつと本当だと思えます。それは歴史家が証明してますけども、その当時、例えば九条家に仕えたと、地方の豪

族のお嬢さんが九条家で何年か仕えてね、嫁に出る時には九条の名前で嫁に出る。そういうことはありますね、昔。だからきつと実の娘じゃなくてもね、地方の豪族の娘が九条の娘だと言つて結婚したんだというふうに、今は歴史の先生がそうおっしゃっていますから、僕もそうだと思う。

そんなふうに法然という人は偉いからね、ちゃんと浄土宗を独立させるためには、まず、公家、天皇、世間から絶対に尊敬を集めないといけない。だから彼は一心金剛の戒師として全部貫きます。けども、「どんな凡夫も救われる。人殺しまで救われるんだ。その理由が分からないじゃないですか」ということを、この師資相承の時によほど議論したのだと思います。

選択本願の念仏

なぜかという、天親・曇鸞という人達が一番問題にするのは本願力です。本願です。つまり念仏と言つても、修行の念仏もありま。それからたくさんの念仏がありますね。時宗の念仏もあれば、天台宗の中にも念仏がありますから、だから比叡山には法華堂と常行三昧堂と二つあつて、そしてそれが廊下で結ばれてるから荷い堂と言うでしょう。『法華経』の真理を覚るために念仏を行としてやるわけです。修行としてね。そういう念仏もあるわけです。ところが、法然上人が言っている念仏は「選択本願の念仏」です。『大経』に説かれている念仏。選択本願の念仏と言つて難しいですけども、要するに念仏という行は、これは私たちの修行としてあるんじゃないやなくて、仏様を選んだんですということ。

なぜかという、それは先ほど申し上げたように、凡夫を救うために仏様が本願を建てたのです。その本願をよく見ると、自力を生きる衆生を本願に転回させる。そのために十七願、十八願が建てら

れている。十九願が建てられている。十九願から十八願に、自力から他力に、「雑行を棄てて本願に帰す」というふうに転回させる。それがちゃんと本願の中に説かれている。だから「選択本願の念仏」というのは、これは念仏のいわれ、念仏の理由と言つか、念仏の根拠と言つか、単なるおまじないではなくて、仏様の方が選び取つた念仏なんだ。

なぜかという、凡夫を救うために。どうして救われるのかと言つかと自力を破つて他力に目覚めさせる。そのために念仏の中に無量光というはたらきがある。智慧の念仏。難しいねえ。この中に仏教が分かっている人もおるから、分かっている人は分かっているのや(笑)。

ひとつだけはつきりすると、いい？

これから分かる人も、これまで分かつた人も、いい？

本願に目覚めるといふ時には、今まで生きてきた自力は何のあてもならないといふことが分かるといふこと。人間は誰でも大体生まれながら死ぬまで自力で生きます。だから一生懸命努力すれば必ず報われると思つて頑張る。ところが努力しても努力しても報われない者もおる。だからと言つて自力がだめだとは誰も思わない。もつと頑張りが必要ないからだと思つて。

ところが親鸞聖人のように救われようと思つて努力しても努力しても、いくら努力しても救われない、どうしていいか分からん。その時に、五劫の昔に建てられた本願が罪悪生死の凡夫を救うために建てられていたんです。

私たちはこの世で優れた人もおるし、できの悪い人もおるやが。僕は劣等感に悩まされた。寺川さんは頭が良かったんや、東大出やで。東大の特待生やで。僕はあんまり頭ようなかつたから、やつぱ

りほんまにあかんわと思うて悩んだ。だけど、できが良くても、できが悪くても自力は一緒。そして自力では絶対に救われないうことを何千年も前から、仏様がそう見たという。できる人も、できない人も、どんな人も。僕らはできるか、できんかで悩んだり苦しんだりするわけよ。

仏様のまなざしからすると、そんなのどうでもいいちゆうわけよ。できる者も自力、できない者も自力。その自力では絶対に救われない、というふうに仏様が五劫の昔から見とる。

それがどうしたんやと思うかもしらんけど、親鸞聖人のように、あるいは法然上人のように、一生をかけて自分を救おうと思った人には、なんでこんなに救われんのやろうと悩んだわけよ。

その時に、「一心専念弥陀名号」、一心に弥陀の名号を称えなさいと、「仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけり」と言うでしょう。私たちが気づく前から、自力では絶対に救われないうと、仏様の方が先に、本願の方で見抜いて、だから念仏を称えろと言ってくれとったやないかと。自分が気づくとか気づかんとかと言うよりも、自力は地獄の元やと。地獄の元や、自力が。それを仏様の方がすで見抜いて、そして、本願として建ててくれて、念仏ひとつを選び取ってくれたんだと。だから凡夫が救われるには念仏しかないというのが、親鸞聖人・法然上人の立脚地でしょう。

そうすると本願に目覚める時には、どんな人も、できてもできなくても、自力、それが地獄の元やと仏様に見抜かれとる。地獄になると必ず人を非難しようがね。僕もそうやった。くそつたれと思つて、あんな寺に生まれたから、こんな親鸞聖人みたいな勉強をせなあかんと思つて、私はどれだけ恨んだか。その時に悪いのは父親や。それから生まれた場所や。それから行きたくなかつた大谷大学や。

みいんな私の外側が悪いと思うとつた。ところが松原さんの一言や。「いいところも、悪いところも、好きなどころも、嫌いなところも、初めつからあんた自身じゃないかね」と。「は…」。僕は今まで人ばつかりに文句言うとつた、地獄になると。ところが「最初からいただいとるものをお前が引き受けられんと言つとるだけじゃないか」と。その一言やね。「お前の問題やないか」と。「何が人が悪いんや」と。そらそうや。生まれてきた所を変える訳にもいかんし…。

無量光 無量寿

前にも申し上げたかもしらんけど、北海道にお話に行つた時に、僕の教え子の座敷に行つたら、さつさつと書いとつたのよ。「綿毛は空を舞い、落ちたところがたんぽぽの一生の地」つて。僕は思わず涙が出そうになった。そうやね、文句言つとるのは人間だけやん。他の動物や植物は全部、与えられた場所が自分の死に場所やんか。

「綿毛は空を舞い、落ちたところがたんぽぽの一生の地」。

八割か九割は死んでますよ。岩に落ちたり、川に落ちたり、日陰に落ちるのもあれば、日なたに落ちるのもありますよ。だけど落ちた所がたんぽぽの一生の地です。

それが僕は言えなんだ。そして人ばつかり非難しとつた。それが人間の正直な姿です。その時に「引き受けられんのはお前じゃないか」と。「お前が自分を立てたい、勝ちたい、人に負けたくない、その根性が地獄を作つとるのや」と。その言葉が「ズカツ！」と突き刺さつた。

その時に初めて「無量光」という本願の智慧がわかる。

(本願の智慧と言つても、『大経』に説かれてる教えのことよ。どこかピカッと光つたんじゃないよ。ピカチュウじゃないんだから。

ピカツと光るんじゃないよ。教えを今までよく読んできたことが初めて光に変わるのよ。自分の分らんことを初めから言い当てられとった。だから教えをよく読めば、人間が分らんことを仏様が最初から言うとする。だからこれを「光明無量」と言うのよ。ピカツと光る光じゃないよ。教えをよく聞けば、そうなっている。聞法と云うのは、名号のいわれを聞くため、「名号が何のために、誰のために建てられているのか」、それを聞くために、聞法をするのよ。そのために聞法しとんのやで」

その時に初めて「無量光」という仏様の選択本願の教え全体が、実は最初から自力が地獄の元やと見抜いて、そういう人間をどうして救うかというふうに建てられている、それが本願なんやとわかる。

そしてその時に初めて今まで根拠にしてた自力が立場を失って、「無量寿」という、いいとか悪いとか、勝ったとか負けたとかという相対分別を超えて、「無量寿」という一、如、人間が考える分別を超えた「無量寿」という本願の方に、立たせられる。

無量光と無量寿、これが南無阿弥陀仏に込められた究極的な意味です。それを広く言えば四十八の本願です。

不虛作住持功德

だから親鸞は天親と曇鸞の夢を見たんだ。師資相承で百日戦つてる時。

今日、一番最初に申し上げたでしょう。僕のような馬鹿でも本を書いたら寝れんようになる。二時間ごとに目が覚める、夢を見る。それはね、「師資相承」って、そんな簡単なもんじゃないわけですよ。やっぱり命がけで戦うわけですから。だからその時に戦いながら、法然に分からんとこはお聞きし、自分の意見を申し述べる。そうすると法然は「そうです。その通り、これはこうです」と言っ

て、きつと議論したでしょうね。その中で親鸞は夢を見たと言っているから、天親・曇鸞に決まっている。天親・曇鸞が一番大事にするのは、今言った本願の方です。名号も大事にするけど、本願の方。

この間、西藤さんのところでお話した時でしたかね、「国土莊嚴の中にある言葉と、仏莊嚴の中にある言葉と、同じ言葉があるから、だからこれは還相回向を表しているんじゃないでしょうか」という質問がありました。それはね、国土莊嚴と云うのは、浄土を願生する私たちの衆生が開いたものです。つまり、国土莊嚴があるのに、わざわざあえて仏莊嚴を開かなければならなかったのは、簡単に言うと、「なぜ私たちが浄土に目覚めるのか」という理由です。この理由を言えば、「凡夫が念仏によつて救われるというけど、その理由は本願の方にあるんじゃないですか」。これが親鸞の主張。天親と曇鸞の『浄土論』、『論註』をよく読めば分かるでしょう、と。仏莊嚴、そこに「不虛作住持功德」という大変大事なところがある。

本当は、浄土を願生するだけで、僕らの仏教は完成してる。だから国土莊嚴だけでいいのよ。ところがあえて仏莊嚴を開いたのは、

「なぜ私たちが凡夫が仏道を歩めるのか」、

「なぜ私たちがのような凡夫が浄土を願生できるのか」というと、

「それは如来のはたらきだからだ」

「仏のはたらきだからだ」というふうに、

「仏の不虛作住持功德のところに根拠がある」と。

『論』・『論註』をちゃんと見ればそうなっています」

「お師匠様がおっしゃる通りに、凡夫が念仏によつて救われる。その通りです」「しかしその理由は『大経』の本願の方にあるんです

ないでしようか」と。

これが親鸞と法然の師資相承の時に問題になったことだと思いません。

法然上人が親鸞聖人に託したこと

それは今でも問題です。「念仏がなぜ大切か」という理由を言わないといけない。さっきの僕の言い方では足りないかもしれないけども、とにかく本願に帰って、仏様の方でちゃんと凡夫と見て、その凡夫を助けるためにどうするかというふうに本願を建てているんやから、その本願の方に凡夫が救われる理由があるに決まってる。だから「実地面、表向きには、念仏によつて凡夫が救われる、それでいい。だけど、裏の方では、本願の道理があるということを確認に示さなければ、必ず聖道門から問題が起こる」ということを、この時、親鸞聖人は言ったと思います。

法然は「そうですね」と言つて「あなたがおっしゃる通りです。今の状況を見てごらんなきい、聖道門が出家の僧侶だけの仏教を語っている。だから「凡夫まで救われる、そして簡単な行なんだ、念仏でいいんだ」と善導大師がおっしゃっている、それを前面に押し出して、私は浄土教を独立させるといふ事に命をかけます。だから、あなたは『大経』と「親鸞」という天親・曇鸞の名前を貰つて、私の「念仏ひとつでいい」という理由を書いてください」と親鸞に法然上人が託したんだと思います。

見て来たことのように言いますけども、親鸞聖人のところに一回携帯で電話して聞いてごらん(笑)。親鸞は「そうそう」と言うから。それは何も想像じゃありません。『選択集』をよく読むと、これ一辺倒です。

ひとつだけ本願が出てきます。第十八願の本願が王本願だというふうに出て来るだけで、法然は、なぜ王本願なのか、なぜその十八願によつて救われるのかということについては言及していない。そこを表と裏とね、きちつと道理を建てなければ、浄土宗、法然上人がせつかく、この日本で浄土教を独立させたことが無駄に終わるから、と思つて親鸞は命がけで『教行信証』を書いたんです。

あの人が能力があつたとか、なかつたとか、もう、そんなことは関係ない。法然上人が託したんです。「親鸞と名告りなきい」と。そして「私は実地面、念仏ひとつで凡夫が救われる、これを表にして浄土教を独立させたんだけど、その理由の方を『大経』の本願によつて明らかにしてください」と。

だから親鸞聖人の『教行信証』は全部、教の巻は『大経』、そして行の巻、教、行、信、証、真仏土、化身土の巻、全部、「本願」でしょう。そして本願も、なぜその本願が必要なのかと言うと、自力から他力、「自力を生きる人間をどのようにして阿弥陀が救おうとしているか」という本願だけを選んでる。そして標拳にしている。だから『教行信証』全体は本願論だというのは、法然に託されたからです。

それは今でも同じだと思います。つまり、「なぜ念仏が大切なんですか?」、「どうして念仏で凡夫が救われるんですか?」。その理由を『教行信証』はどうしてもはつきりさせなければならなかった。

だから教の巻、今日、最初に読みましたけども、「**謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり**」。「阿弥陀如来の本願のはたらきによつて、仏教が成り立つ仏教なんですよ」と言うところから始まる。それ以外の仏教は全部自力をもとにした仏教でしょう。そうじゃなくて如来の本願、それも、さっき言った四十八願あつて、私たち凡夫を仏教に立たせる本願と、それから凡夫を仏教に立たせるには先生

がいる。二十二願の浄土から帰って来た先生によって、私たち凡夫を仏教に立たせる。そういう二種の回向によって成り立つ仏教が「浄土真宗」という仏教なんです、というところから『教行信証』が始まるのは、今私が申し上げたような理由によるというふうに思います。

ちよつとオーバーしちゃったけども、大体お分かりいただけましたね。

『選択集』があるのになぜ『教行信証』を書かなければならなかったのか、そして『教行信証』の独自性は本願論です。だからややこしい、難しい。

けれどもそれは、「凡夫が念仏ひとつによって救われる」という理由を、本願の方で明らかにしていこうとしている。それが『教行信証』の役割、使命です。ですから「教の巻」も、今申し上げたように、回向から始まっていくということになります。

この次から実際に一緒に読んでいきますから、特に『大経』の出世本懐の文は、今申し上げたように、「凡夫がなぜ救われるのか?」、その実際面が説かれています。つまり阿難ですね。それがお釈迦様の教えに遇うただけで救われる。これどういふことなのかね。それを『大経』の文章で読んでまいりますので、皆さんは二か月ありますから、暗記して来てください(笑)。いや、ほんとほんと。毎日読んどいたら暗記せんでも覚える。それが大事。

それじゃあ一応、今日はここまでということにしておきます。

《質疑》

(質問一) 先程の話で『選択本願念仏集』の「念仏に帰しぬ」の根拠としてあるのが『教行信証』の「本願に帰す」ということで、それで思ってたんですけども、「念仏に帰しぬ」が国土莊嚴に相当するならば、「本願に帰す」が仏莊嚴に相当すると思うんですけども、そのように解釈すると、国土莊嚴というのは仏莊嚴からの回向よるといふ解釈でよろしいんでしょうか。

(先生) 結構です。そういう読み方はね、よほどよく『論註』を読んだ人でないとなかなか分からない。けども今おっしゃたことは究極的に言えばそういうことだと思えます。本来、二十九種莊嚴の国土莊嚴の中に、主功德という仏莊嚴もある。それから眷属功德という菩薩莊嚴も入っているわけです。だから国土莊嚴の中に実は浄土の莊嚴が全部収まっているはずなのに、あえて主功德とか菩薩莊嚴というものを別建てして説かなければならなかったのはなぜか。ものすごく理由があるわけです。それはどこにも書いてないから、なかなか分かりにくいんです。けれども、親鸞聖人が『教行信証』に引いている引き方をよく見ると、不虛作住持功德は真仏土の巻に引いています。

真仏土というのは、仏そのもの。だから不虛作住持功德は衆生のところに持つて来てはいけません。仏そのものだから。だから親鸞聖人は真仏土の巻に引く。そんなふうに親鸞聖人がどう読んでいたかというふうに見ると、今あなたがおっしゃっているように、国土莊嚴の中に、国土莊嚴というのは衆生と直接関係している。私たちがさっき言ったように光明無量ということをいただいて、そして無量寿と言うところに立った本願の世界。その本願の世界を国土莊嚴と

して世親菩薩は感動して述べてるわけです。ところがあえて仏莊嚴と菩薩莊嚴がなぜあるかということについてはよく分らないんだけれども、親鸞聖人の引用の仕方から見ると、あなたがおっしゃった通り。仏莊嚴はなぜ衆生を願生させるのか、理由、そして、衆生を願生させるために諸仏がおるんですと。菩薩と言うのは諸仏やから、親鸞聖人からいえば法然上人がいるわけです。だから法然上人の教えによって、私たちは願生するわけです。だからあなたがおっしゃるような了解をして、親鸞聖人はそのように了解したのだというふうに思います。

(質問二) 最初に伊藤さんみたいな方が質問すると後の方が質問しにくいね。僕が最初に馬鹿な質問をして、またアホなことをとって、その間に考えていたかどうかと思っていたんですけど。延塚先生より立派な話をされる先生はもしかしたら日本にいらっしやるかもしれないんですけど、質問に対する答えは延塚先生が日本で一番じゃないかと私はいつも思っているんです。田畑先生が「質問して恥をかけ」と最初言われましたよね。今から僕も恥かくかもしれないんだけど、延塚先生は、そんな恥ずかしいような質問でも、うまいことね、かつこいいいように、ちゃんと話してただけです。その質問した人のレベルに分かるように答えてくださる。そういう意味で、僕は日本で一番じゃないかと思うんです。今日の話も、正直半分ぐらいの人は何のこっちゃか分からなかったと思うんですよ。だけど、せっかくの機会ですから、普段思っていることを質問されたらいいと思います。

それで質問をひとつします。
先生、「教の巻」は今まで考えた事なかったんですけど、その標準は大体四十八願のうちの願文をどれか上げることが多いのに、「大無

量寿経」だけとして、そして内容も短いし、『大無量寿経』の釈尊と阿難が出遇ったところだけしか、それも『如来会』も『平等覚経』もその出遇いのところしか引用してない。ということは、「先生に私たちが遇えばいいんだ」というのが「教の巻」の教なんでしょうか。それと、「光顔巍巍」と釈尊を阿難が仰いだ、「輝いています」と仰いだ、初めて本當の師だと分かったという、その「師と出遇うことだけがその教えだ」と言ってるんでしょうか。

(先生) 基本的にはそうです。浄土教は師の教えに遇うことね。そこから仏教が始まりますから。ですから基本的には師の教えに遇うことから始まるから、だから教の巻は師との出遇いになっているわけです。ところがね、うまく言えないんですけども、何でそういう質問したのかなと思っただけから考えてるんですけども、その師の教えに遇うということがなかなか難しい。

だから、いきなり、ある日突然、「光顔巍巍」と輝きましたと、そんな馬鹿なことあらへんよね。多分、阿難はお釈迦様のお世話をしてた、ずうつとお世話をしてね、ところが仏弟子の中で、まあ、できがいい悪いという言い方はどうかと思うけども、結局お釈迦様が生きとる間、悟れなかつたんですよ。先に悟っているのは、例えば舍利弗。この人はできが一番良かった。だからお釈迦様の徒弟で、お釈迦様のお世話をしている阿難がね、全然悟れないというね。

あの少し、まあ言い方はちよつとあれだけど、多分白痴だったと思うんですけども、周利槃陀伽、あの周利槃陀伽でも悟っているのにね、あいつは何しとんのやと、みんなから思われたでしょうね。だからきつと劣等感にさいなまれて悩み続けたんじゃないでしょうか。で、そういう苦労と言うか、悩みと言うか、それが仏法の教えに遇う時に必要です。

だれでも、ある日突然、棚からぼた餅のようにはいかない。親鸞聖人はほぼ二十年かかりました。あの法然上人でも、あのできのいい法然上人がちゃんとはつきりそう言ってる。どんだけ日本中探して回っても師がいなかった。師がいなかったというのをもう少し言うと、善導のような「機の深信」を教える人は一人もいなかったと書いてる。

わかりますね。師というのはそういうもんです。だからおそろく、できが悪いということ、今度はある意味で言えば逆手にとつて、「この通りできが悪い、だから仏法に目覚めるんです」というような教えに遇うためには、よほどの聞法と苦しみがあったでしょう。だけど『大経』は出遇いからしか始まっていません。

ところが親鸞聖人の『教行信証』をよく読むと、信の巻に阿闍世の物語が長く引用されます。それは皆さんご存知のように、父親を殺して、そしてかさぶたができて、そして苦しんでどうしていいかわからない、もう死ぬような思いをしながらお釈迦様にやつと遇うわけです。それがね、たぶん阿難が出遇うまでの聞法の苦勞を、親鸞聖人はそこで足したんだと思われんです。

ですから阿難の出遇いとね、それから、月愛三昧という、ほら、阿闍世がお釈迦様に遇うたときに叫ぶね、あの叫びは同じ。言葉が同じなんです。だから「月愛三昧とお釈迦様と阿難との出遇いは同じなんだ」と親鸞聖人は見ていたことになります。そうすると、「師と出遇うまでにこれだけの苦勞がいるんです」ということをご自分の意見じゃなくて、経典として『涅槃経』を長く引いている。そういう意味があると思います。それでいいですか。

(註)・月愛三昧 釈尊が阿闍世王の身心の苦悩を除くために入られた三昧の名。清らかな月の光が青蓮華を開花させ、また夜道を行く人を照らし歡喜を与えるように、仏がこの三昧に入れば、衆生の

煩悩を除いて善心を増長させ、迷いの世界にあつて、さとりを道を求める行者に歡喜を与える。

(質問三) 仏教用語の内容の質問をさせていただきたいと思えます。

二種の回向のところは往相回向と還相回向があつて、還相回向の言い方を「一生補処」というような言い方をされているところを何度も目にするんですけど、わざわざ言い換えて、どういう意味かよく分からんわけです。一生補処という意味が、そこをちよつと説明いただければと思います。

(先生) えつとね、そもそも今ご質問された方は、二十二願のことをおっしゃってるわけです。ですから二十二願を開けてください。十八頁(東聖典)の一番最後のところ。二十二願ですが、ここを読みます。

「たとい我、仏を得んに、他方の仏土のもろもろの菩薩衆、我が国に來生して、究竟して必ず一生補処に至らん」。そうですね。

ここまでの内容は、阿弥陀の浄土以外の仏の浄土からたくさんの菩薩が阿弥陀の国に來て、そして阿弥陀の姿を見て、阿弥陀の智慧に遇うて、究極的には、「必ず一生補処に至らん」。一生補処というのは、これはお釈迦様の仏というものを補う位と言う意味です。ですからこの世で仏になった方はお釈迦様一人ですね。ところが、いいですか、皆さんが浄土に生まれて阿弥陀を見たときに必ず仏になる。ということになるでしょう。それを一生補処といいます。お釈迦様の次に自分が仏になる。それを一生補処といいます。ですから今読んだところ、

「たとい我、仏を得んに、他方の仏土のもろもろの菩薩衆、我が国に」、阿弥陀の国に来て、究竟的にはお釈迦様の次に必ず仏になる。

その前半の意味を取って、二十二願を「一生補処の願」と言う場合があります。いいですね。その後を読みます。

「その本願の自在の所化、衆生のためのゆえに、弘誓の鎧を被て、徳本を積累し、一切を度脱し、諸仏の国に遊んで、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して、無上正真の道を立てしめんをば除かん。常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。もし爾らずんば、正覚を取らじ。」

こうありますね、前半はさつき言ったように阿弥陀の浄土に生まれたものは、必ずお釈迦様の位を補って、必ず仏になる。それが「一生補処」という意味です。だから二十二願を前半の方に重きを置いて読む場合には「一生補処の願」といいます。

ところが、後の方は、必ず仏になるとなったものが、衆生のために自分は教化したいと、だから諸仏の国に、今度は浄土から出て行って、阿弥陀の浄土から他のところに出て行ってね、そして自分は教化したいというのなら教化していらつしやいと、すぐに仏になるということを除いてやるから、だから仏にならなくていいから、菩薩のまんま教化に出て行きなさいと。こういう意味です。その後半の方の意味を重視してつける時には「還相回向の願」と言います。浄土から菩薩として出て来て教化する。こういう意味でね、

ですから二十二願は「一生補処の願」と言う場合と、「還相回向の願」と言う場合と、二つあります。あなたがおっしゃった通りね。その場合に、「一生補処の願」と言う時には、前半の方に必ず仏になると言う方に主眼がある言い方だと。それから「還相回向の願」と言う時には、浄土から出て来て教化する還相回向と言うところに重きがあるわけですから、後半の方に重きがある。その場合は「還相回向

の願」と読む。だから二十二願には二つの願名を使い分けて使っているということになります。いいですか。

文責は編集者の田畑正久にあります。